

男子ハンドボール競技における世界トップレベルのPivot

のスクリーンプレーの特徴

吉田 守一 (201912028、ハンドボールコーチング論)

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード： スクリーンプレー、映像分析、生起率

【目的】

本研究では、男子ハンドボール競技における世界トップレベルのPivotのスクリーンプレーの特徴を明らかにするとともに、研究者自身の選手としての成長に求められる技術と、今後の日本のPivotが身に付けるべき技術を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象者は、ポーランド1部リーグでプレーする本研究者Yoshida(日本代表、193cm)とA. Karalek(ベラルーシ代表、196cm)、L. Fabregas(フランス代表、198cm)、V. Iturriza(ポルトガル代表、193cm)である。Yoshidaは21/22ポーランドリーグを、他の3名は21/22ヨーロッパチャンピオンズリーグを標本とした。分析項目は、①Pivotの位置、②スクリーンの方法、③スクリーンした位置、④Pivotの動き、⑤バックコートプレーヤーの動く方向、⑥バックコートプレーヤーのプレー結果、⑦パス方法、⑧キャッチの成否、⑨キャッチの手、⑩キャッチ後のプレー結果の10項目であった。

分析結果は、各個人ごとに項目間の生起率を比較した。有意水準を5%とし、カイ二乗検定を用いて比率の差を検定した。3つ以上の項目で有意差が認められた場合には、Ryanの方法により有意水準を調整して多重比較を行った。

【結果と考察】

1. 各選手のスクリーンプレーの特徴

Yoshidaは、位置は中央(3-3)、中央(3-2)にいたことが多く、ディフェンダーの前面に対して自身の側面と背中を使うスクリーンが多かった。スクリーンは6~6.9mの位置で半数以上をかけて、バックコートプレーヤーからのパスはバウンドパスでもらうことにより、重心を下げてスペースを確保してプレーを行っていた。

Karalekのスクリーンの位置は、6~6.9m、7~7.9mを基本としているが、8m~でスクリーンをかけることも他の3選手と比べると多い傾向にあり、目の前

にきたパスを自ら移動して取りに行くのではなく、自身のスクリーンで相手ディフェンダーを抑えることにより自身の前にスペースを作り出してプレーを行っていた。

Fabregasは、身長(198cm)を活かしてゴールエリアライン際の空間を支配し手を上に高く上げ、その手に向かってバックコートプレーヤーからストレートパスをしてもらうことを中心にプレーを行っていた。

Iturrizaは、外側(3-2)の位置にいたことが他3選手と比べて有意に多いことから、単に2対2だけではなく、バックコートプレーヤーの1対1に対してもしっかりとゴールエリアライン際で合わせてプレーを行っていた。

2. Yoshidaのスクリーンプレーへの提言

Yoshidaは同程度の身長のIturrizaとKaralekのプレーを参考にすることでプレーの幅が広がると思われる。バックコートプレーヤーからのパスはバウンドパスであることが、この2名の共通点として挙げられた。

一方でキャッチの手は、Yoshidaは両手が39.5%と利き手および非利き手と有意差はないものの最も多い傾向にあった。しかし、Karalek、Iturrizaは利き手または非利き手が最も多い傾向にあった。その場合キャッチする手と反対の手で相手ディフェンダーを抑えることができる。これらのことからYoshidaは、ワンハンドキャッチを増やすことでより大きなスペースが確保でき、安定したスクリーンが実現できると考えられる。スクリーンが安定するとKaralekのようにゴールエリアラインから離れた高いディフェンダーに対してもスクリーンをかけられるようになり、プレーのバリエーションとプレーエリアが広がり、相手ディフェンダーはより守りにくくなるであろう。これらのプレーを実現させるには、筋力の向上、逆手の使い方、自身のスペースの作り方のトレーニングを行なっていく必要があると考えられる。